

ジャーパーン、ジンダバード！

私はといえば、内心別の立場からこれら純朴なイスラム住民の反応を恐れていた。湾岸戦争に日本が九十億ドルという巨額の支援を決定した事が大々的に報じられていたからである。希望と尊敬の的であった日本が、「実は宿敵・米英の走狗」という裏切られた印象を拭え切れなくなっていた。事実、サウジアラビアと直接の利害関係のないイスラム民衆は公然と「フセイン万歳」を叫び、ペシャワールの街角では至るところに肖像画が貼られていた。湾岸戦争勃発以来、激しい反米デモが連日荒れていた。欧米人の姿は忽然と消え、一部は帰国し、残留した者の一時的なパニックに陥っていた。欧米諸団体の「難民援助プロジェクト」はとどめをさされ、UNHCR(国連難民高等弁務官)の事務所さえ爆破される事態になっていた。

しかし、ペシャワールよりもさらに隔絶されたパシユトウン部族のイスラム伝統社会のただ中で、元来ならばカーファイル(異教徒)として異物扱いされる場所で、共にムツラーの説教に耳を傾けている自分が奇妙な立場にいると思った。日章旗を描いたJAMSのジープが遺体を輸送し、私は「同国人」として扱われていた。

「JAPAN」の名は、日露・太平洋戦争と共にヒロシマ・ナガサキで広く奥地にまで知られている。「私たちは日本を尊敬しています。日本が被害者として苦しみを知っているからです」というのは、少なくともこの地域の良識を代表する意見であった。だが、「日本はイスラムをどう見ているか」というありふれた問いも、今の私には残酷に響いた。「我々はアッラー(神)の欲する平和を愛する。内戦で諸君は何を得たか。平和こそが日本の国家理念だ」という言葉は常に現地で説得力をもっていたものである。そして、言葉は私を離れて、地獄を体験した者には事実の共感を生んだ。



しかし昨夜「ジャーバーン、ジンダバード（日本万歳）！」といった或る長老の言葉が、釈然とせぬこだわりで耳の底にこびり着いていた。お世辞なのか好意なのか分からぬほど、私は屈折した気持ちを抱いていた。恐らくその両者が正しかったのであろうが、それはJAMSのチームが献身的な努力で地域のバシユトゥン（アフガン人）住民の信頼を勝ち得てきた成果で、この状況下では奇跡的とも言えた。

湾岸戦争勃発直後、世界各地のイスラム諸国で日本人が投石をうけたニュースを聞いていた私は、日章旗を塗り潰すことさえ考えていた。元来JAMSが日章旗を描いていたのは、良好な対日感情を利用して、欧米諸国に対するテロ行為のとばっちりを避けるためだったからである。日本で喧しい日の丸論はペシャワールでは無縁だった。我々には死活問題であった。しかし今、目前にする事實は、それがここでは平和と良心のシンボルであることだった。もともと保守的な人間である私は国旗に抵抗はなかったが、戦争と結びつく何か暗いイメージも拭えなかった。日章旗は日本人の誇りと後ろめたさを引きずっている。だがこの時、この殺伐な光景の中で翻然と気づいたのは、それが我々日本人の思惑とは全く無関係に、人々に明るさと希望をふりまいて存在していることであつた。日章旗が鮮やかに美しかった。

久しぶりに戻った住民たちは、この離れがたい故郷の廃墟に、尚も希望をつないでいた。しかし、かつてこの土地を守るためにゲリラとして果敢に闘い、勇猛で知られたJAMSの仲間が、ぼつりと言った。

「ムジャヘディン（イスラムの聖戦士）なんか、もう居やしない。いい奴は皆逝っちゃった。金で頭のいかれた奴らとルース（ロシア人）が戦争ごっこをしてるのさ。だがいつまで……」



昨夜うつすらと降り積もった雪が、どこまでも澄み切った紺碧の空を背景に、山々の稜線に美しい純白の縁取りを与えていた。それは、壮大なヒンドウクツシユの氷雪から解け出るクナール河の悠然たる水の流れと共に、静かに何ものかの意思と和やかさを届けているように見えた。そして荒寥たる人里の光景も意に介さぬように、すべてをその中に抱擁するようだった。

我々はまた戻ってくることを誓って、車にエンジンをかけた。舞い上がる砂塵が時折、故郷を再び後にする人々の姿を隠した。風化して消えゆく人の営みの確かな実感の中で、日本が何か蜃気楼の如く、ただの幻のような気がした。あつたにしても、それはこの光景からは遠い、余りに遠い世界であった。

